

Career Cruising

キャリア・クルージング

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。
人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探すため、
各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

逆境をバネに 小説家としての才能を開花

高野和明氏 Takano Kazuaki

小説家



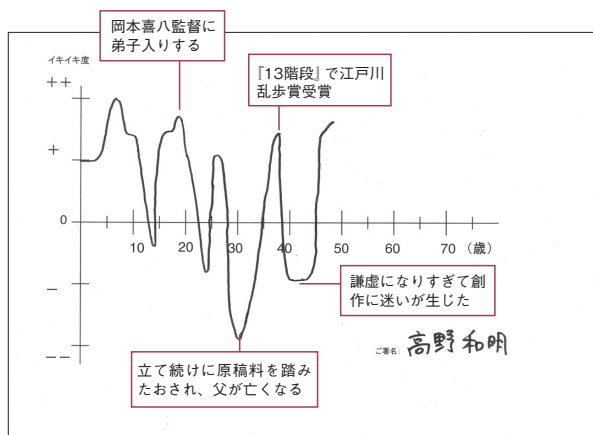
Career History

高野和明氏の キャリアヒストリー

1964年	0歳	東京都にて歯科医の次男として生まれる。6歳から物語を書きはじめ、10歳で観た映画『ジョーズ』に衝撃を受けて映画監督になることを決意。12歳から自主映画を撮りはじめる
1977年	12歳	中高一貫の進学校に入学。小説は書かなくなり、映画研究会に所属して自主映画制作に没頭した
1984年	19歳	高校2年生から浪人時代にかけて書いた脚本が城戸賞の最終選考に残る。その縁で岡本喜八監督門下に入り、映画の現場でスタッフとして働く
1989年	24歳	渡米。ロサンゼルス・シティ・カレッジの映画科で学ぶ一方、テレビ番組の撮影現場で働く
1991年	27歳	帰国後、脚本家デビュー。テレビのサスペンスドラマなどの脚本を書きながら、映画監督を目指す
1996年	32歳	20年ぶりに小説を書きはじめ、新人賞に応募するが、落選が続く。脚本執筆で生活を支える
2001年	36歳	2000年冬から書いた『13階段』で第47回江戸川乱歩賞を受賞し、小説家として注目される
2008年	43歳	自身の連作短編集『6時間後に君は死ぬ』のドラマ化にあたり、映像作品の監督デビュー
2011年	47歳	『ジェノサイド』を発表。直木賞候補となる



『ジェノサイド』
(2011年3月刊 角川書店)



直筆の人生グラフ。浮き沈みが多く、「どん底」は32歳前後の3年間。電車賃にも困るほど貧窮したが、それが小説を書くきっかけになった。

デビュー10年目に発表した『ジェノサイド』(2011年)で直木賞にノミネートされた高野和明氏。惜しくも受賞は逃したが、同作は2012年2月現在、30万部を超えるベストセラーとなっている。『ジェノサイド』は、コンゴ、アメリカ、日本を舞台に3人の主人公がそれぞれの立場で「人類滅亡の危機」と格闘するエンターテインメント小説。アメリカの政治、アフリカ紛争史、薬学などの知識を織り込んだ長編を一気に読ませ、日本の小説では出色のスケールの大きさだ。長年のファンからも代表作との声が高い『ジェノサイド』を生み出すまでの過程を高野氏に聞いた。

19歳で岡本喜八監督に弟子入り。 大局的な判断の大切さを学んだ

もともと目指したのは映画監督。小学校時代からハリウッド映画を中心に数々の名作に触れて刺激を受けた。

「当時、ブルース・リー映画がブームでしてね。影響を受けた子供たちはみな空手を習いに行くのに、自分は映画を作りたいと思いました。小学校6年生から映画を撮りはじめましたが、動機は『ウケたい』という欲求だったと思います。お笑い芸人と同じですね。小説家になった今も、自分が作りたいのはエンターテインメント。根底にある娯楽志向は変わりません」

中学・高校では映画研究会に所属。小説は書かなくなり、自主映画制作に没頭。スティーヴン・スピルバーグや黒澤明などの作品に傾倒する一方、映画の専門書などもむさぼるように読んだ。

「小説も映画も、鑑賞する側から作り手にまわったとたん、謎が山のように押し寄せてくる。たとえば脚本を書くとき、会話だけで5分も続くシーンを書いてもいいのか、とか。そういう疑問を解決するには、先行作品を参考にするのが早道なんです。技術者の方たちが、機械を分解して仕組みを理解するのと同じですね」

表現の勘所をつかんで脚本を書き続け、19歳にして脚本家の登竜門といわれる城戸賞の最終候補に。その縁で岡本喜八監督に弟子入りし、助監督、制作進行など幅広い仕事を経験してプロの映画作りを学んだ。

「当時はまだ、監督さんの教えは言葉のうえだけの理解にとどまっていた。しかし作り手として経験を積むうち、どれだけ大切なことを教えていただいたのか、その重要性が身に沁みてわかってきます。いちばんの教え

は、人をひきこむ物語を作るには大局的な判断が重要だということです。物語を進めていくにあたって、どういう事柄をどういう優先順位で観客に伝えていけばいいのか、といったことですね。今でも小説を書いているときに、岡本監督の言葉が耳元によみがえることがあります。とくに『ジェノサイド』は、監督さんと2人で書いているような気さえしました」

また、映画の本場に身を置いてみたいと24歳でロサンゼルスに留学し、多様な国籍の人たちと触れ合ったこともその後の創作活動に大きな影響を与えた。

「たとえば日本人は泣ける映画を好んで観ますが、外国人からすると、なぜお金を払ってまで悲しい思いをするのかが理解できない。しかも『病気で人が死にました』というような作品は、あまりに拙劣で欧米では相手にされません。そういった、日本人にしかウケない作品と世界に通用する作品との違いを肌で感じ、自分は世界中の人たちを楽しんでもらえる物語を作りたいと思うようになりました。だから『ジェノサイド』でも、日本人にしか理解できないようなファクターは、極力避けて書いたつもりです」

小説を書くのは リスクを伴う大勝負だった

26歳で帰国した後はテレビのサスペンスドラマなどの脚本を書きながら映画監督を目指したが、デビューの機会は訪れなかった。

「それどころか、30代前半は原稿料の未払いが続いて小銭にも困る生活。父の死などの不幸も重なり、『これで自分の人生は終わった』というような絶望的な状況が何度もありました。そんななか、自分を憐れんでいても道は開けないと悟り、人生の一発逆転を狙って20年ぶりに小説を書きはじめたんです」

それまでも小説を書きたいという思いはあったが、脚本の仕事への悪影響を考えて控えていた。高野氏にとって小説を書くというのは、脚本の仕事を失うリスクを伴う大勝負だった。その後、1年がかりで長編小説を書いて出版社の新人賞に応募したが、落選。別の短編小説も選に漏れた。脚本の仕事が忙しくて小説が書けない時期

を経て、再び書いた『13階段』が2001年の江戸川乱歩賞を受賞。念願のベストセラーとなった。

「どん底だった30代前半には二度と戻りたくはありませんが、あの時期は一人前の物書きになるために必要な経験でした。恵まれた家庭で何不自由なく育った自分にとって、貧しさを味わったことも、実社会の凶暴な一面を見せつけられたことも、人間の社会を描くための必須の勉強だったと思います」

やりたいことを仕事にしたからには その分野で全力を尽くしたい

小説家としてデビュー後の5年間は、1年に1回のペースで作品を発表。着々とファンを増やしていったが、スランプに陥った時期もある。

「小説でも脚本でも、何かを創作しようとする際には、100%の確信なんてあり得ないんです。面白くなると信じて突っ走るしかない。創作には正しいうぬぼれ方というのがあるんです。ところが、デビュー直後は乱歩賞に恥じない作品を書かなければと謙虚になりすぎ、仕事のうえでも迷いが出ました」

その反省から、その後は作品の勢いを損なわないよう「意図的にうぬぼれて」書くようにしている

という。また、高野氏の小説は場面の映像が目に浮かぶのが持ち味の1つだが、これには映像分野での経験が生きていることは間違いない。『6時間後に君は死ぬ』(2007年)のテレビドラマ化にあたっては、脚本の執筆と最終話の映像監督も担当している。

「監督として映画を撮りたいという思いは変わらず続けています。ただ、映画化を意識して小説は書きません。小説では、小説にしかできないことを追求したい。その点、ドラマ作りの監督ができたことは、小説と映像の違いをより深く理解できたという点でも貴重な経験になりました。このときに掴み取ったことは、『ジェノサイド』に生かされています。創作という仕事は、経験値がすべてだとあらためて感じています。それに、これはどんな仕事でも同じだと思いますが、全力を尽くさないと身につかないことというのはたくさんあるんです」



映画と小説を知り尽くしたからこそ生まれた 『ジェノサイド』の世界観

大久保幸夫 ワークス研究所 所長

『ジェノサイド』を読んだときに、描いている世界のスケール感に圧倒された。なぜこのような小説が書けるようになるのか？それが知りたくてインタビューをお願いした。それ以前の著作もすべて読んだが、やはり『ジェノサイド』は異質である。

高野氏に率直に、「なぜ『ジェノサイド』で作風が変わったのか？」「現在につながっている重要な経験は何か？」と尋ねてみた。作風の変化はまったく意識にないとのことだったが、重要な経験を3つあげてくれた。

1つはアメリカ留学。そのときに他国からの留学生に言われた「お涙ちょうだいのものに金を払う人はいない」という言葉に衝撃を受けたという。日本では当たり前にある悲劇の映画は世界的には受けない。映画や小説はエンターテインメントでなければならぬと実感した。

そして、人生グラフにも描かれたどん底の経験。父の死と原稿料の未払いによる明日の食事代もないほどの貧乏生活。そのときに「弱いほうに味方する」という人生観を得た。

さらに『6時間後に君は死ぬ』で映像作品の監督を経験したこと。そこで映画と小説はまったく違うもののだとしみじみ実感したという。

高野氏自身の思いは小説以上に映画にあるようだが、小説を書く以上は絶対に映画ではできないことを書こうと決めたのだという。小説を売ってそれを映画化するというのは今や成功の基本パターンだが、彼の場合は、小説ならではの

の内容にこだわるようになった。

人は一直線に成長・進化していくわけではなく、ここぞというときに大きなジャンプがある。アメリカのリーダーシップ研究機関であるCCL (Center for Creative Leadership) はこれを「quantum leap experience」と表現し、神戸大学の金井壽宏教授が「一皮むけた経験」と訳した。高野氏は、一皮むけた経験から得た「エンターテインメント観」「人生観」「小説観」を『ジェノサイド』という作品で一気に開花させたのだろう。

この小説を読むと映像が浮かんでくる。これを日本人が書いたの？と驚く。その理由は高野氏へのインタビューでやっとわかってきた。

高野氏の「一皮むけた経験」

